

イギリスの学校臨床心理の実践と教育心理士養成について

伊藤 嘉奈子（子ども心理学科・准教授）

1. はじめに

私は、2015年4月から2016年3月までの1年間、イギリスに留学する機会を得ることができた。そこで、この1年間の様々な経験をもとに、心理学と教育の側面について、Londonの様子を交えながら述べていきたい。なお、本稿は、2016年7月21日に開催された鎌倉女子大学学術研究所主催第30回講演会の講演内容をまとめたものであるが、講演内で使用した学校紹介や心理教育プログラム実践に関するビデオ映像にかかわる部分は削除し、代わりに新たな内容の加筆を施した。

2. 留学先の大学について

(1) Institute of Education

まず、日本語のイギリスとは、England（イングランド）、Scotland（スコットランド）、Wales（ウェールズ）、Northern Ireland（北アイルランド）の4つの国の連合王国のことであり、正式名は、The United Kingdom of Great Britain and Northern Ireland（グレートブリテン及び北アイルランド連合王国；略してUK）と言う。本稿においては、UK全体について述べる際には日本語の「イギリス」の語句を使用する。

私が1年間を過ごしたのは、Englandの首都Londonであり、Institute of Education University College London（略してIOE UCL）に留学した。IOEは1902年創立で、教育に特化した大学院大学であり、ロンドン大学（University of London）を構成する大学（college）や研究機関（institute）の内の一つという位置づけだった。留学して半年過ぎた2015年9月に、IOEのすぐ隣にあるUniversity College London（略してUCL）と統合し、UCLを構成するcollegeやinstituteの1つという位置づけになったため、途中から正式な私の所属名称はUCLとなった。

IOEは、QS世界大学ランキングの教育分野で毎年世界1位となっている。教員養成コースがあるため、普段、教育現場でトレーニングを受けながら大学で学ぶ学生が多かった。さらには、教育に関する研究、例えば、教授法やカリキュラム開発などの研究が盛んに行われており、イギリス国内のみならず、海外からも多くの研究者が研究のために訪れており、毎日何かしらのセミナーや講演会、研究発表、学会が開催されていた。

私が所属したのは、Department of Psychology and Human Developmentという学科であり、子どもや青少年を主な対象とした心理学や発達に関する様々な研究が盛んに行われており、後述するEducational Psychologist（教育心理士）の養成コースがあった。

(2) University College London

UCLは1826年設立で、London最大の大学であり、設立当初から、いかなる階級や宗教の者でも入学を許可した大学であった。さらに、1878年には、女性を男性と対等な基準で

受け入れた、**England** で最初の大学となった。日本からの留学生も多く、1863年には長州**Five**の伊藤博文、井上馨らが留学しており、その記念碑が大学敷地内にある。正門前の大通り沿いには、夏目漱石が最初に住んだ下宿があり、漱石も**UCL**で授業の聴講をしていたそうである。**UCL**にも心理学科があり、ここは**Clinical Psychologist**（臨床心理士）養成コースがあった。また、学内には、充実した図書館の他に、動物学の博物館（**Grant Museum of Zoology**）や、エジプト考古学の博物館（**Petrie Museum of Egyptian Archaeology**）、**UCL**美術館（**UCL Art Museum**）があり、小さいながらも充実したコレクションを持ち、一般に公開されていた。心理関連では、心理統計を学ぶ際に出てくるゴールトンの**The Galton Collection**という施設があった。ここでは、彼の優生学をめぐる見学者同士が激しい言い争いになる場面があり、私が仲介役をする経験もした。

3. 大学の場所と私の住まいについて

Fig.1 のとおり、**IOE**、**UCL** は **London** の中心地の、大英博物館の裏手に位置し、**London** の名所に徒歩で行けるといって非常に利便性の高い場所にあった。大学周辺は **Bloomsbury** と呼ばれ、芸術、教育、医学とゆかりのある文教地区で、**Charles Dickens** や **Virginia Woolf**、**Vladimir Lenin** などの住居もあった。よって、この地域に住みたいと思ったが、その家賃は驚くほど高く、とても私が住める所はなかった。結局、**London** の家賃の高さ、電車の運行の悪さ（遅延、キャンセル、たびたびのストライキ）、治安の問題、家主の都合による退居の理由により、3回引越をした（Fig.2）。この頃、ロンドン漱石記念館（2016年9月閉館）に行き、夏目漱石と自分の引越に関わる境遇を重ね合わせ、勇気を得たものだった。ただ、引越するたびに、そこに住んでいる方の人種、宗教、言語、文化、習慣などが全く異なり、人種のるつぼということをもまさに肌で感じ、知ることができたので良い経験となった。



Fig.1 London における IOE の場所



Fig.2 London における私の居住地域

留学中は、ただ毎日必死に新たな環境・生活に適応すべく過ごしていた。自分の研究に資するため、かつ、語学力を伸ばすため、大学院の授業やセミナー、講演会、研究発表会などに参加もしていた。授業運営や授業内容、視聴覚教材の使用法、学生の様子、討論の仕方など日本と異なる点が多く、刺激を受けた。授業などでは、日本の状況について説明するよう指名されたり、研究発表を促されることも多く、上手く説明できず悲しい思いを

したり、反論ができず悔しい思いもした。そのような中、歴史学を教えていた教授の主催による **Lunch Walk** があり、ガイドブックに載っていない場所を訪れながら **London** の街やその歴史を知ることができ、私にとってストレス発散の手段になっていた。

4. 研究課題について

下山 (2007) は、イギリスの臨床心理学の規模と発展時期は日本と類似している点が多く、比較しやすいが、その後の発展の仕方や、臨床心理学の内容が大きく異なっていると述べている。丹野 (2001) や下山 (2007) によると、イギリスで臨床心理学は応用心理学という位置づけであり、アカデミック心理学やその他の関連領域と共同研究を実施している。その際、**evidence** に基づく研究を重視し、認知行動療法の実証的効果研究などが盛んであり、科学者-実践者モデル (**Scientist-Practitioner Model**) が確立している。しかし、日本では、精神分析やユング心理学、クライアント中心療法など、学派の違いが強く存在しており、事例研究が中心を占め、心理療法やカウンセリングの成果やクライアントの心理的症状についての量的データを持っていないとの指摘がある。よって、イギリスの心理臨床は、日本の臨床心理学の方向性を考える上で役立つものと指摘している。

さらに、日本では、臨床心理士や学校心理士、臨床発達心理士などの様々な資格があり、現在、国家資格化が進められている。一方、イギリスでも、臨床心理学関連の資格は複数あるが、国家資格と同等の位置づけのものが多く、資格間の職務内容や所属機関など区別がなされていることが伺える。

そこで、次の3つの研究課題について日英比較を行いたいと考えた。まず、教育の場における心理臨床の意義と限界について、イギリスにおいて教育現場で働く心理専門職である **Educational Psychologist** (以下、略して **EP** と記す) と日本の心理士職と比較をしながら考察したい。そして、**EP** の養成や現場での活動を視察し、比較検討を試みたい。最後に、学級で行う心理・教育プログラムの日英比較を行いたく、実際にイギリスで行われているプログラムを視察し、それを日本に適合する形で開発し、導入できないか検討したい。以下でこれらの課題に関して視察・調査を実施し、得られた内容を紹介していく。

5. イギリスにおける心理臨床の専門家とその養成について

私の所属学科の学科長で、留学中にメンターになって下さっていた **Jane Hurry** 先生の紹介により、**IOE** の **EP** 養成コースで講師をされている **Karen Majors** 先生や、**EP** として活躍している **Claire Jones** さん、**David Bowles** さんと会い、**EP** 養成課程への参加や、**EP** の所属機関や **EP** が担当する学校の視察、さらにケースの陪席をするという貴重な機会を得ることができた。以下で、彼らにインタビューした内容の内、講演や論文掲載の許可を得た内容、及び、一般公開されている資料や情報をまとめて述べていく。

(1) 主な心理臨床に関する専門職

まず、子どもや青少年にかかわる主な心理の専門職についての日英比較を **Table1** に示す。**England** では、**Clinical Psychologist** (臨床心理士、以下では **CP** と略して記す)、**EP** が主なものである。カウンセリング心理士は、比較的新しい職で、カウンセリングの研修の受講などにより取得可能な資格であり、スクール・カウンセラーという職業などに就く

際に保持している人がいるそうである。なお、CPやEPの有資格者は、後述のとおり、その専門性を活かす職に就いており、スクール・カウンセラーになる人はほぼいないとのことだった。

(2) CPとEPの職務の違い

CPとEPとでは、職務内容や対象者、所属機関が異なる (Table2)。CPはhealth領域、すなわち医療機関にかかわり、不安やストレスから鬱やメンタル・イルネスまで扱う。イギリスの国営保健サービスでは、国民はGPという家庭医を持ち、NHS (National Health Service) において無料で診察を受けることができる (Fig.3)。留学生の私でもGP登録が完了すれば、無料で診療を受けることが可能だった。NHSでは認知行動療法を無料で受けることもでき、多くのCPが働いていた。一方のEPはeducation領域、すなわち教育機関にかかわり、子どもや青少年を対象とし、困難の克服や教育的・心理的発達を支援する職である。

Table 1 主な心理臨床に関する専門職

England	日本
<ul style="list-style-type: none"> • Clinical Psychologist (臨床心理士) • Educational Psychologist (教育心理士) • Counselling Psychologist (カウンセリング心理士) • Forensic Psychologist (犯罪心理士) • Occupational Psychologist (職業心理士) 	<ul style="list-style-type: none"> • 臨床心理士 (日本臨床心理士資格認定協会) • 臨床発達心理士 (臨床発達心理士認定運営機構) • 学校心理士 (学校心理士認定運営機構)
↓	↓
<ul style="list-style-type: none"> • すべて Chartered Psychologist という • 国家資格と同等という位置づけ 	<ul style="list-style-type: none"> • 各協会・機構による資格という位置づけ (2016年現在) • 5年ごとの資格更新が必要 (2016年現在) • 今後、国家資格化へ

Table 2 CPとEPの職務の違い

Clinical Psychologist	Educational Psychologist
working with people to help them deal with conditions ranging from anxiety and stress to depression and mental illness	helping children and young people to overcome difficulties and further their educational and psychological development
➡ Health	➡ Education

(3) CP, EP 養成コースへの出願条件

CP、EPになるには、3年間の大学院博士課程の養成コースへの進学が必須である (Table3)。出願条件はCPとEPで若干異なるが、心理学系の大学および大学院を優秀な成績で卒業/修了し、1年以上の臨床経験を有し、Graduate Basis for Chartered Membership (GBC) への登録が必須である (Table4)。このGBC登録は厳しいものであり、精神面のチェックなども行われるとのことであった。例えば、心理臨床はストレスフルな職であるゆえ、そのストレスに耐えうる資質があるかどうかなどを考慮するそうであった。また、

臨床経験や語学証明は細かな基準があり (Table5)、これらの条件を経てようやく各大学院での書類審査、及び面接審査となる。よって、入学時点ですでに現場で即戦力となる人たちばかりという印象を強く受けた。

2015年度の入試結果は、UCL の CP 養成課程では応募者1,114人に対し合格者42人、IOE の EP 養成課程では応募者約2,000人に対して合格者40人であった。入学後、1年目は講義が中心で、2年目からは現場での実習と大学での講義を受け、3年目は実習とそのケースレポートの作成、及び、博士論文の作成と非常にタイトな時間を過ごしていた。ただ、日本と異なり、修了後に資格取得した後は、資格の更新制度はないとのことであった。

Fig. 3 イギリスの国営保健サービス

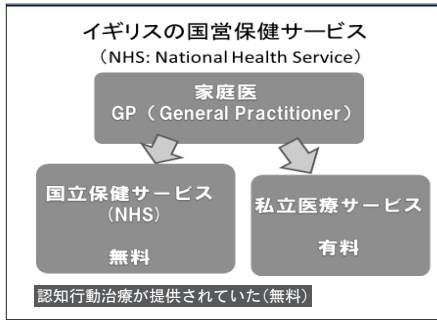


Table 3 CP, EP になるには

・大学院博士課程の指定校への進学 <div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;"> CP 30校 </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;"> EP 12校 </div> </div>	
・Doctorate programme (3年間) -year 1: 講義 -year 2: training (週4日、給料あり) + 講義 -year 3: training + 博士論文と事例報告集の提出	
【参照】日本の指定大学院数 (2016年度) 臨床心理士: 163校、臨床発達心理士 41校	

Table 4 CPとEPの主な出願条件 (2015年度)

出願条件
<ul style="list-style-type: none"> ・心理学系の大学および大学院を卒業/修了 ・優秀な成績の証明 (特に、CP: 統計とリサーチの優秀な成績が必要) ・英語のspeaking and writing 能力の証明 ・1年以上の臨床経験 ・Graduate Basis for Chartered Membership (GBC) への登録
↓
書類審査 + 面接審査

Table 5 出願条件の実務経験 (2015年度)

Experience of working	
CP <ul style="list-style-type: none"> ・ at least one year's (full time equivalent), experience of paid or voluntary work in ・ clinical ・ community ・ clinical/academic settings ・ directly relevant to clinical psychology 	EP <ul style="list-style-type: none"> ・ a minimum of 1 year full-time experience of working with children and young people within: ・ education ・ health ・ social care ・ youth justice ・ a childcare or community setting <p>e.g. as teachers; psychology assistants; learning mentors; roles in children's centres; children's homes; NHS services and social services</p>

(4) England における EP の活動の実際

East London に位置する Barking & Dagenham 地区の EP が所属するオフィスを訪問し、EP の活動実践の視察とインタビューを行う機会を得た。前述の通り、講演や論文掲載の許可を得た内容を述べていく。まず、England の義務教育は11年であり (Fig.4)、EP は主に小・中学校の子どもにかかわることが多いが、0～19歳までを対象としているとのことだった。また、学校に常駐しているのではなく、地方教育局に所属し、学校からの要請を受けて出向していた。EP 養成コースに通う院生も給料を得ながら実習していた。各 EP の担当学校数は異なり、院生は 5 校程度、若手は10校前後、経験者は13～15校とのことであった。

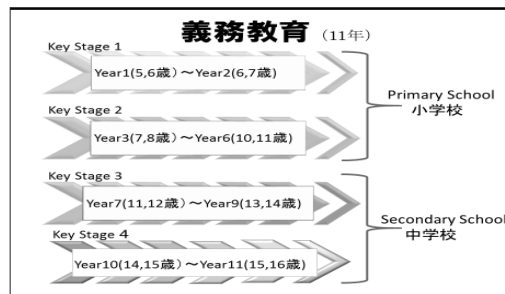


Fig.4 England の義務教育制度

(5) 特別な教育的ニーズ (special educational needs: SEN)

イギリスでは、Special Educational Needs (特別な教育的ニーズ)、略して SEN という、障がいのある子どもの教育制度がある。そして、「special educational provision (特別な教育的な手立て)」を必要とするほど、「learning difficulties (学習における困難さ)」があるならば、その子どもは特別な教育的ニーズがあると捉える。特徴的なことは、学習における困難さの有無が重視されるということであり、障がいというラベリングを行うのではない点である。この学習における困難さをアセスメントするのが EP であり、その子どもの教育的ニーズを具体的に報告書にまとめていた。これは EP の非常に重要な職務であり、この他に、子どもへプレイセラピーや認知行動療法を行う EP や、いじめ予防などのグループ・ワークを行う EP もいるとのことであった (Table 6)。

Table 6 EP の活動の実際

* 対象	・ 0～19歳までの子どもにかかわる
* 主な仕事	<ul style="list-style-type: none"> ・ アセスメントと、その報告書やステートメントの作成 ・ 学校場面での行動観察 ・ 担任教師や保護者と面接 ・ 子どもへの面接、プレイセラピー、認知行動療法、グループ・ワーク (各 EP による) ・ コンサルテーション ・ 他の専門家との連携 など

(6) Special Educational Needs Coordinator

さらに、学習の困難さが大きい子どもに対しては、EP が法定評価 (Statutory Assessment) を実施し、ステートメント (Statement) と呼ばれる書類を作成する。そして、保護者が希望した場合などには、特別学校 (special school) に行くこともある。一方、ステートメントはないが、SEN の対象となる子どもに対しては、Special Educational Needs Coordinator (以下、略して SENCO と記す) という SEN のコーディネーター役の教師が中心となって支援を行う。この SENCO は、学校に常駐しており、EP やソーシャル・ワーカー、精神科医、ペアレント・ケアラーなど外部の専門家と学校、及び保護者の橋渡し役を担っていた。具体的に述べると、EP は、SENCO からの依頼を受けて学校に出向き、

アセスメントを実施し、その結果を **SENCO**、担任教師、保護者などと共有し、必要な手立てを検討し、支援方針を考えていた。**EP** は、数週間後、再度学校に出向き、子どもの様子を観察し、子どもや保護者などと直接面接をしたりして、**SENCO** と担任教師などともに支援方針についての再検討を繰り返していた。必要であれば、再度、新たなツールを用いてアセスメントを実施したりもしていた。**SENCO** のコーディネートによって、各専門家が行った専門業務がチーム支援として一つにまとめられ、子どもや保護者の支援につながる様子を視察することができた。

(7) 実際の学校現場での実践の様子

Barking & Dagenham の公立小学校及び中学校での **EP** の実践活動に同行する機会を得ることができた。この地域は、近年、**migrant** (移民) や **refugee** (難民) が多く住むようになり、700人から1,000人規模の学校が多く、1年でクラスの半数以上が転校することであった。そして、親子ともに**English**が第一言語ではないために、他者と上手くコミュニケーションが取れないという状況も見受けられた。子どもに関しては、学校での勉強についていけず、**SEN** の対象として、**English** や **Math** の勉強を個別で受けたりしていた。**EP** は、**SENCO** や教師と情報を共有しながら、アセスメントや支援方針を立てていた。

学校では、**EP** など外部の専門家の存在は全く特別ではない様子が伺えた。例えば、ある小学校のクラスの一番後ろで、**SEN** のある子どもと **EP** が話をしたりしていても、クラスの子どもはそれを特別視することは全くなかった。学級担任にインタビューしたところ、クラスの子どもたちは **SEN** について理解しており、子ども間で自然にサポートし合っているため、**SEN** のある子どもを無視したり、排除したりし、いじめることは全くないとのことだった。ただ、筆者の視察した学校は **SEN** の体制が整っており、学校や担任教師も非常に協力的で積極的に支援を行っていたが、やはり学校間による差は見られるとのことだった。

6. いじめ予防教育としての Hate Play Project について

ここからは、学級で行う心理・教育プログラムの実践について紹介していく。学校における深刻な問題として、世界共通で挙げられるのがいじめである。このいじめに対しては、いじめが起こってからへの対応ではなく、いじめの発生を防ぐことを重視した予防教育が世界各国で行われている。イギリスも独自のプログラムがあるため、筆者は実践を視察し、日本への導入の可能性について検討したいと考えていた。そして、**London** の公立中学校で実施された **Hate Play Project** という、演劇を用いたいじめ予防教育プログラムの実践を観察調査する機会を得ることができた。この結果は、2016年度鎌倉女子大学紀要に掲載予定であり、論文内容の重複を避けるために、本稿では大部分を削除することにし、概要を以下で述べていく。

(1) Hate Play Project の概要

イギリスで広く用いられている活動で、**Theatre in Education** (以下、**TIE** と略す) という教育に演劇を取り入れる活動がある。視察した **Hate Play Project** は、**TIE** のプログラムを複数制作し、提供している **Box Clever Theatre** という演劇カンパニーが企画したもので

あった。具体的には、London の公立中学校6校の中学生（13～15歳）1,010人を対象としたいじめ予防を目的としたプログラムであり、プロの俳優が中心となって全6セッションを進行していくものだった。生徒は、プロの俳優が演じるいじめに関する劇を観劇し、感想や意見、自らのいじめ体験やいじめられている子へのメッセージなどを詩や歌、ダンスなどにして表現していく。続いて、6校の各生徒が学外施設に集合し、いじめの起こるメカニズムやストレス・コーピングなどについて学び、意見をシェアリングする。最後は、各校の代表生徒がこのプロジェクトでの成果や、自校でのいじめへの取り組みなどをプレゼンテーションするという内容である。質問紙調査の結果、生徒、教師ともに、このプロジェクト全体に対し非常に高いプラスの評価をしたことが明らかとなった。

視察を通して、集団に対して行うプログラムの内容や実施方法、及び、子どもの反応が日本とは異なる点が多く、日本での導入にあたっては検討を要す点が多々存在した。詳細については前述のとおり、紀要論文を参照されたい。

7. 大学生から高校生へのピア・メンタリングを導入したキャリア教育実践

続いて、England にある Royal Holloway University of London で行われている Alana James 先生による Psychology Mentoring Project を視察する機会を得ることができた。この大学は、1879年に女性の高等教育を目指し設立された大学であり、現在は共学となっている。CP養成コースもあり、学部生の多くはCPを目指しているとのことであった。

このプロジェクトは、大学生が高校生に対してキャリア発達の支援を行う、異年齢間のピア・メンタリングというプログラムである。

(1) キャリア教育

近年、日本でキャリア教育の重要性が高まっている。キャリアという語句の定義は様々あり、統一されていないが、単に仕事や業績を指すのではなく、生き方など広い概念を含む用語である。筆者は2009年から、中学生と高校生を対象としたキャリア教育の実践研究を行ってきた。その結果、グループワークがキャリア発達を促進させる一因となりうることが明らかとなった。ただし、1回限りの単発のキャリア教育実践での結果であったため、長期間にわたる継続的プログラムによる実践の効果研究が課題であった。また、キャリア教育は海外では研究が盛んになされているため、海外のプログラムで日本に適用できるものを検討し、日本に適合する形でのプログラム開発を行うことも今後の課題であった。

(2) ピア・メンタリング

まず、メンタリングとは、成熟した年長のメンター（mentor）と若手のメンティ（mentee）とが基本的に一対一で継続的に交流し、役割モデルと信頼関係の構築を通じてメンティの発達支援を行う関係性をいう。メンタリングにより、キャリア発達の促進効果が期待できることが明らかとなっており、産業分野、特に、企業で実施されている。

そして、ピア・メンタリングとは、支援の方法を学んだ人々が、困っている仲間（peer）を援助するという活動であるピア・サポートの一種であり、ピアがメンターあるいはメンティとなり、キャリア発達を支援する活動である。欧米においては、ピア・サポートも、ピア・メンタリングも広く活用されている。しかし、日本では、青少年向けのメンタリン

グ・プログラムはほとんどないと言える。その理由には、ピア・メンター養成の困難さ、ピア・メンターとピア・メンティのマッチングの難しさなど様々な要因が挙げられよう。

(3) Psychology Mentoring Project の概要

そこで、Royal Holloway で行われている Peer Mentoring Project を視察し、研究に資する知見を得たいと考えた。このプロジェクトは、心理学科に所属する大学生がピア・メンターになり、大学受験資格を得る過程にいる高校生で、現在高校で「心理学」を受講している16～18歳の生徒（Year 12 A-level psychology pupils）に対してキャリア発達の支援を行うというものであった。England では、近年、政府の方針により、大学進学者の増加が推し進められるようになり、そのための様々なプロジェクトが実施されるようになってきているとのことであった。本プロジェクトでは高校生に対して、大学に行くということの現実認識や、大学ではどのような心理学を学ぶのか、心理学を学ぶことの意義は何かなどについての情報を提供することを目的としており、Royal Holloway への入学を勧める活動ではなかった。例えば、CP を目指す学生の中には、大学の授業で心理統計など数理的なことを頻繁に扱うと思っておらず、入学後に現実に直面し、不適応を起こす学生もいるそうであった。さらに、現在、心理学を学んでいるものの、心理学が将来のキャリアにどのように活かすことができるのか見出せず、心理学に興味関心を持ってない高校生も多いという現実があるため、この支援プロジェクトを立ち上げたとのことだった。

具体的内容は、Table7 に示す通りであり、2つの公立学校において、Royal Holloway の8名の大学生がメンタリングを行った。まず、最初の回で、大学生が生徒全員に対して、大学で心理学を学ぶということについてプレゼンテーションする。続いて6回にわたるセッションにおいて、小グループでのメンタリングを実施する。セッションごとに活動内容は異なり、セッション1では、メンターとメンティの自己紹介の他、お互いをよく知った上で、各メンティがこのプロジェクトでのゴール（プロジェクト全体を通じた各生徒の到達目標）を決定する。その際には、メンターが一緒に考え、支援をする。続く、セッション2では、大学ではどのような心理学の内容を学ぶのか、心理学を学ぶことの意義は何かなどを理解するよう支援する。セッション3では、Aレベル程度の心理学のトピックに関して学習支援を行う。次に、大学訪問をし、実際に研究発表会に参加したり、心理実験などの調査研究に協力したり、大学キャンパス・ツアーを行う。セッション4は、オープン・セッションとし、例えば、履歴書の書き方（大学入試の書類審査の提出書類の一つであり、日本の形式とやや異なる）などの支援をする。セッション5は、メンティの設定したゴールを見直し、このプロジェクトを通しての自己体験について発表するプレゼンテーションを計画し、最後のセッション6で発表する。

そして、プロジェクトの事前・事後に質問紙を実施した結果、メンターとメンティ両者の自尊感情（self-esteem）と自己効力感（self-efficacy）が向上したことが明らかとなった。また、メンティである高校生は、このプロジェクトを通して、心理学や大学に関する理解が広がり、アカデミック・スキルズを向上させることができたことと非常に高く評価した。一方、メンターである大学生は、高校生と共に活動することが自分にとって良い経験となったと評価し、この活動を通じてコミュニケーション・スキルズが向上したと自己評価した。また、大学で何がやりたいのか、どのような大学に入れば自分を活かせるのかなどについ

て高校生に説明する経験は、メンターである大学生にも有効に作用し、CP から EP へ進路変更するなど、自己のキャリア発達をも促す活動となった学生がいたそうである。

(4) 今後の研究計画

筆者は、このプロジェクトを日本の学校に適合する形で導入したいと考え、現在、研究を進めている。具体的には、大学生がピア・メンターとなり、高校生に対してキャリア発達の支援を行うという、異年齢間でのピア・メンタリングの実践研究を行いたい。特に、心理学や心理学科で学ぶということに特化せず、全般的な内容、すなわち、大学で学ぶということ、高校と大学の違い、将来のキャリアと大学での学びの意義などについて取り扱うこととし、高校と大学の移行期の適応に焦点を当て、大学進学におけるキャリア発達の支援プログラムの開発を試みたいと考えている。理想と現実のギャップに入学後に気づき、不適応に至るようなケースを防ぎ、高校から大学への移行期のより良い適応を支援するためにも、ピア・メンタリングが有効と考える。よって、この留学中に得た知見を活かし、実証的研究を行っていききたいと考えている。

Table 7 Mentoring activities schedule (James, 2015)

Mentoring Session	Description
Presentation on psychology at degree level	• Talk by mentors to all pupils to introduce studying psychology at University
Mentoring session 1	• Introductions between mentors and mentees • Getting to know each other • Helping mentees set goals for the project
Mentoring session 2	• Understanding what it is like to study a psychology degree • Including: grade requirements and types of courses
Mentoring session 3	• Study support around an A-level topic • Going through an exam paper with mark scheme
University campus visit	• Listen to research talks, take part in research and have a campus tour
Mentoring session 4	• Open session with topic to be agreed with mentees e.g. how to write CVs and personal statements
Mentoring session 5	• Reviewing mentees goals and planning their presentations showing their experience in the project
Mentoring session 6	• Mentees' presentations on the mentoring experience

最後に、Jane Hurry 先生、Karen Majors 先生、Claire Jones さん、David Bowles さん、Michael Wicherek さん、Mari Kondo さん、Fred Murphy さん、Alana James 先生、さらに、本学の教員・職員の方々に心から感謝申し上げる。

【引用文献】

Box Clever Theatre (2015). What will you do? *The Hate Play Project symposium Programme*.
<<http://www.boxclevertheatre.co.uk/>>

Institute of Education <<https://www.ucl.ac.uk/ioe>>

IOE Educational Psychology (Professional Educational, Child and Adolescent Psychology)
<<https://www.ucl.ac.uk/ioe/courses/graduate-research/educational-psychology-professional-educational-child-adolescent-psychology-dedpsy>>

伊藤嘉奈子 (2017). イングランドの中学校における Theatre in Education を用いたいじめ防止プログラム 鎌倉女子大学紀要 第24巻 (投稿中)

James, Alana (2015). Psychology Mentoring Project, Royal Holloway University of London.

下山晴彦 (2007). イギリスの臨床心理学の歴史 ―日本との比較を通して― ヒューマンサービスリサーチ 10, 19-30.

丹野義彦 (2001). 実証にもとづく臨床心理学に向けて 教育心理学年報 40,157-168.

The British Psychology Society <<http://beta.bps.org.uk/>>

UCL Doctorate in Clinical Psychology <<http://www.ucl.ac.uk/dclinpsy/>>

University College London <<https://www.ucl.ac.uk/>>